

令和4年度
教職課程
自己点検評価報告書

令和5年3月
神戸親和女子大学

神戸親和女子大学 教職課程認定学部・学科一覧

- ・文学部（国際文化学科）

- ・教育学部（児童教育学科、スポーツ教育学科）

大学としての全体評価

神戸親和女子大学は、文学部・教育学部の2学部があり、文学部は国際文化学科、心理学科、教育学部は児童教育学科、スポーツ教育学科から構成されている。

このうち、教員免許は、国際文化学科に中学校教諭一種免許状(国語)及び高等学校教諭一種免許状(国語)、児童教育学科に中学校教諭一種免許状(英語、数学)、小学校教諭一種免許状、幼稚園教諭一種免許状及び特別支援学校教諭一種免許状(知的障害者、肢体不自由者、病弱者)が取得可能となっている。

本学における教員養成について、カリキュラムに関しては教務委員会、教学マネジメント会議にて、教職課程の検討、各種実習への対応、答申や法令改正への対応は教職課程検討部会にて双方で連携しながら、学生の教員免許取得に向けての支援を行っている。

また、本報告書においては、前述のように中等教職課程は文学部と教育学部にまたがっていることなどから、今回の報告書は、学部毎ではなく、大学全体の状況とともに、必要に応じて中等、初等、幼稚園の課程毎に現状や特徴を述べることとする。

神戸親和女子大学
学長 三井 知代

目次

I	教職課程の現況及び特色	3
II	基準領域ごとの自己点検・評価	5
基準領域 1	教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み	5
基準項目1-1	教職課程教育に対する目的・目標の共有	5
①	現状説明	
②	長所・特色	
③	取り組み上の課題	
基準領域1-2	教職課程に関する組織的工夫	6
①	現状説明	
②	長所・特色	
③	取り組み上の課題	
基準領域 2	学生の確保・育成・キャリア支援	8
基準項目2-1	教職を担うべき適切な人材（学生）の確保・育成	8
①	現状説明	
②	長所・特色	
③	取り組み上の課題	
基準項目2-2	教職へのキャリア支援	9
①	現状説明	
②	長所・特色	
③	取り組み上の課題	
基準領域 3	適切な教職課程カリキュラム	10
基準項目3-1	教職課程カリキュラムの編成・実施	10
①	現状説明	
②	長所・特色	
③	取り組み上の課題	
基準項目 3-2	実践的指導力養成と地域との連携	11
①	現状説明	
②	長所・特色	
③	取り組み上の課題	
III	総合評価	12
IV	『教職課程自己点検評価報告書』作成のプロセス	13
V	現況基礎データ一覧	14

I 教職課程の現況及び特色

- (1) 大学名：神戸親和女子大学 文学部/教育学部
- (2) 所在地：神戸市北区鈴蘭台北町 7-13-1
- (3) 教職課程の現況

① 認定を受けている教職課程

学部・学科名等	教職課程種別
文学部 国際文化学科	中学校教諭一種（国語）
	高等学校教諭一種（国語）
教育学部 児童教育学科	小学校教諭一種
	幼稚園教諭一種
	特別支援学校教諭一種（知・肢・病）
	中学校教諭一種（英語）
	中学校教諭一種（数学）
教育学部 スポーツ教育学科	中学校教諭一種（保健体育）
	高等学校教諭一種（保健体育）

② 神戸親和女子大学教職課程の目標

本学の教育の理念・目的を踏まえ、教員養成の目的を達成するための目標として、次の 5 つを掲げている。

- ① 教育に対する使命感や責任感、教育的愛情の養成（学校教育についての理解、課題を探究する力）
- ② 社会性や対人関係能力の育成（他者との連携・協力、コミュニケーション）
- ③ 幼児・児童・生徒理解や学級経営力の育成（子どもについての理解、コミュニケーション）
- ④ 教科・保育内容等の指導力の育成（教科・保育内容の理解、教育実践）
- ⑤ 社会に貢献しようとする意欲・態度の育成（ボランティア活動などへの理解や参加）

この目標は、教職課程の履修カルテに明記しており、学年ごとに学生が自己評価を行い、その年度での達成状況を確認するとともに、次年度の目標を設定することによって、教員としてのキャリア形成を図っていくことにしている。

③ 教員の養成に係る組織情報

≪教員養成に係る組織体制≫組織図



※HPより抜粋 「教員養成の組織と教員」

URL https://www.kobe-shinwa.ac.jp/about/data/training/training_2.html

II 基準領域ごとの自己点検・評価

基準領域1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み

基準項目1-1 教職課程教育に対する目的・目標の共有

①現状説明

教育学部（児童教育学科・スポーツ教育学科）の教育目標には、「豊かな教養と専門的知識をもち、他の人々と協力して人間の発達と教育にかかる課題に取り組み、その解決に持続して努力できる人材、さらにそのような協働の活動においてイニシアティブのとれる人材を育成する」と定められている。

加えて学科毎に、児童教育学科の場合、「子どもの教育と発達に関する専門的知識と技能をもった実践力のある人材を育成する。」とし、スポーツ教育学科の場合は、「現代社会におけるスポーツと人間発達並びにその教育に関わる諸問題に対応できる専門的知識と技能を有し、学校や地域社会においてスポーツ教育を担う人材を育成する」定められている。

さらに児童教育学科においては、卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に沿って、学位を授与することとしており、その内容からより鮮明に本学が育成したい教師像が浮かび上がってくる。

ディプロマ・ポリシーには子どもの教育と発達に関する専門的知識と技能を修得し、全人的な教養に裏打ちされた専門性と豊かな実践力を身に付けた教育・保育人材として、以下の能力を求めている。

- 使命感と責任感をもって、人間愛にあふれた教育・保育を実践することができる。
- 教育・保育に関する専門的知識や技能に基づいて主体的・創造的に思考し、判断し、表現することができる。
- 豊かな社会性や人間関係形成力を養い、他者と協働することができる。
- 教育・保育に関する国際的な視野をもって社会に貢献し、地域に根ざして活動することができる。

また、教育学部スポーツ教育学科は、「学校教育、学校体育・スポーツについての専門的知識を有し、学校等での隣地調査・実習を通して、健康・スポーツに関わる教育活動を、企画・実践・探求することができること」を学位授与の要件の一つとして定めている。

上記の方針は、学生に配布される学生要覧に記載されている。加えてHP上にも掲載されており、広く周知されている。

②長所・特色

既述したアドミッションポリシー及びディプロマ・ポリシーが示す目指すべき教師像については、教職課程の必修科目でもある「教職論」等でも触れられており、学生にとってあるべき教師像について考えさせられる機会が多い。

③取り組み上の課題

理念・目標や目指す教員像は、入学時、進級時のオリエンテーション時に説明するだけでは十分な理解が得られないこともある。②長所・特色の欄でも記述はしたが、今後は更なる周知の機会が求められる。

また、教職課程教育の目的については、教育目標やディプロマ・ポリシーから独立して設定すべきかどうかの議論も今後進めていく必要がある。

なお、中等教職課程を設置している文学部国際文化学科の教育目標やディプロマ・ポリシーには、教職課程にかかる言及がなく、今後の設定が急務である。

基準項目1-2 教職課程教育に対する組織的工夫

① 現状の説明

本学では、教職課程や実習の管理・支援にあたる組織として教職課程・実習支援センターを設置している。教職課程・実習支援センターには、学科長で構成される教職課程・実習支援センター運営委員会、さらに下部組織として教職課程検討部会（以下、「検討部会」とする）を設置し、全学的な教員養成のための計画、実施、評価の場としている。（概略図については、P4 参照。）

検討部会においては、中教審の答申や法令改正への対応、カリキュラム改正に関すること、教育実習先での出来事への対応等を検討・共有を行っている。

この検討部会の構成員は、学科の枠を超え、教職課程を設置する3つの学科から研究者教員と実務家教員が選出されており様々な観点から深い意見交換が行われ、教職にかかる諸問題について常に最善の解を見出せるような体制を構築している。

また、検討部会における事務は教職課程・実習支援センターが担当しており、部会での審議・報告内容について、遺漏なく把握している。

2023年3月現在、教職課程・実習支援センターは、センター長、副センター長の児童教育学科教員2名と、5名の事務職員から構成されている。センター長及び副センター長は、兵庫県、神戸市の公立学校における校長職の経歴を持ち、教職課程・実習支援センターの統括を主たる業務としているが、その他にも教職課程科目の担当、教育実習の統括（教育実習校訪問）、教員採用試験合格にむけた学内セミナーを担当している。非常に広範な業務を担当することにより、本学における教職課程の全貌を俯瞰できる立場にある。

また5名の事務職員は、校種ごとに教育実習を担当している。縦割り業務で学生対応が不十分にならないよう、配慮が必要な学生等については、十分な情報共有を行い教職課程・実習支援センター全体で学生のサポートにあたっている。

また、年1回『教職課程実習支援センター・研究年報』を発刊し、研究論文、実践記録発表の場を提供している。

なお、ICT 教育に関する設備については、学生にとって少しでも快適な環境で教職課程科目の履修ができるよう学内に Wi-Fi 環境を整えている。また、教育現場で積極的に活用が求められている電子教科書についても、教科、学年等のバランスを考慮しながら、年次計画で購入計画の策定・実際の購入を行っている。

さらに、2023 年 2 月 3 日に児童教育学科の全教員を対象に、教職課程・実習支援センター長より FD 活動の一環として「令和の日本型学校教育と教員養成の課題」と題して研修会が行われた。この研修を通じ、教職課程の担当教員は、現代の教育現場が抱える問題は何なのか、教師不足の現状などについて最新の知見を身につけることができた。また、2023 年 2 月 7 日にスポーツ教育学科に於いても、教員採用試験の前倒しへの対応等教職課程を取り巻く動向について学科内で共有し、カリキュラムや配当年次の見直し等について議論が行われた。特に入学当初の教職へのモチベーションをいかに維持するかが課題として挙げられた。

②長所・特色

教育実習先の訪問については、全ての実習校訪問を原則としているが実習時期、受け入れ先の意向なども踏まえ電話等での情報交換になる場合もある。訪問を担当する教員は、訪問先での授業見学、学校長や実習指導ご担当の先生方との情報交換を行ったり、適宜実習中の学生への指導・助言を行ったりしている。また、訪問後、教職課程実習支援センターへ訪問内容の報告を提出することとなっており、実習生の取組状況について、大学全体での把握に主眼を置いている。

実習中の学生からも、授業で利用する Microsoft 社 Teams のチャット機能を使って、教員とのコミュニケーションが取れる状況となっている。

また、実習終了後、実習先より返送いただく成績表についても、極端に悪い成績評価となった場合は、実習担当教員間で対応を協議し、実習先へのヒアリング、必要に応じて、実習生への追加課題等の措置を行っている。

加えて、2022 年度に於いては、小学校の教育実習受け入れ先に向けて、実習後のアンケートを実施し、その結果を評価・分析し 2023 年度以降の実習計画・事前事後指導に活かしていくこととしている。

上記のとおり、教職課程科目の学習のみならず、実践活動の場においてもきめ細かい指導を行っており、教育実習受け入れ校からも例年高い評価をいただいている。

③取り組み上の課題

今後どのようなスパンで、教職課程の自己点検評価を行うのについては、学内の関連機関との調整も含め検討が必要である。

また、教職課程にかかる諸問題に特化した SD・FD 活動の実施についても、今後テーマを深化させた内容で継続的かつ計画的な実施が求められると考える。

<根拠となる資料・データ等>

・本学が定めるポリシーについて (URL <https://www.kobe-shinwa.ac.jp/about/policy/>)

・教職課程実習支援センター 研究年報(※参照 URL <https://kobe-shinwa.repo.nii.ac.jp/>)

※神戸親和女子大学学術リポジトリページ

基準領域2 学生の確保・育成・キャリア支援

基準項目 2-1 教職を担うべき適切な人材(学生)の確保・育成

① 現状説明

本学の教育学部 児童教育学科の「入学者の受入れ方針(アドミッション・ポリシー)として、以下の内容(抜粋)を掲げている。

○子どもの教育と発達に関する専門的知識と技能を持った実践力のある人材を育成することを目的としています。

○学生には、子ども理解や教育・保育方法に関する理論を学ぶとともに、行事やボランティア活動に参加したり、異文化交流などにも積極的に参加することも求めます。

そのため、児童教育学科では、幼稚園・小学校・中学校(数学・英語)・特別支援学校の教員、あるいは保育士になりたいという強い意志があり、同時に、以下の点を満たしている者を入学生として受け入れている。

○専門的知識を学ぶ前提として、基礎学力を幅広く身につけている人。より得意な分野があればなおよい。

○部活動などの課外活動やボランティア活動などに積極的に取り組んでいる人。

○他者を尊重し、理解し、交流を図ろうとする積極的な姿勢を持っている人。

以上のアドミッションポリシーをHPはもとより、入学試験要項で周知している。

また、スポーツ教育学科では、児童教育学科と同様に、「対象者に合わせたスポーツ教育を理論と実践から学びたい人」をアドミッションポリシー内に定めている。

② 長所・特色

本学では、受験生の特性に応じた入試制度を多く設定しており、様々な資質・能力を持つ学生が教職を目指せるようにするとともに、入学後も共に高め合って学べる体制を整えている。入学後、実際の講義が始まるまでのオリエンテーションにて、入学後から教員採用までの過程、教職の意義、在学期間中における体験活動の重要性等について時間をかけて説明している。

③ 取り組み上の課題

とはいえ、入試の多様化に伴う入学生の学力担保が大きな課題となっている。制度上の担保として、教員免許状取得の為に必須である「教育実習」(3~4年次にて実施)を履修するにあたっては、教育原理をはじめ、各教科指導法等の科目の単位取得を内規として設定し

ている。しかし、その内規をクリアし、教育実習現場に送り出した学生の中には、時折、低い評価を受けることがある。

今後、大学としてこのような学生に対して、教育実習の事前のみならず、事後にも効果的な指導を行っていくことが大切であると認識している。

基準項目 2-2 教職へのキャリア支援

① 現状説明

本学では、入学時に取得希望免許・資格を登録させ、次年度の履修登録時に継続しない者は取り消し作業を行い、教員免許・保育士に関しては、教職課程・実習支援センターの許可を得ることになっている。継続希望者は、履修カルテの入力等をさせる仕組みをとっている。

進路については、キャリアセンターが行う進路希望調査や個人面談を通じて一人一人の状況を把握するよう努め、Teams から情報提供を行っている。

2 年次には、現場で働く卒業生から話を聞く「職業講話」、3 年次では教育委員会や幼稚園・保育所の現場の先生方から話を聞く「教員養成講座」「保育者養成講座」を実施。4 年次生で合格をした学生から、教員採用試験に向けてどのように勉強をしていけばいいのかについて話をしてもらう「合格者発表会」も実施している。

また、3 年次 11 月頃には、自治体毎に次年度の教員採用試験の動向について説明会、3 年次 3 月から 4 年次 4 月にかけて、実施要項や大学推薦等についての説明会を実施している。

なお、課程科目にある「教職実践演習」では、それぞれの校種毎に、フィールドワークを実施しており、保護者対応や授業以外の様々な校務についても理解が深まるような機会を設けている。

② 長所・特色

本学の特色としては、教職課程・実習支援センターが 3 年次から 4 年次の一次試験まで、授業の空き時間と 2・3 月の春休み期間を利用して、週 10～15 コマの教採対策セミナーや、集団討論、模擬授業などの対策を実施している。この対策は教育委員会や現場の管理職を経験された実務家教員が中心となって実施している。

また、キャリアセンターでは教員採用試験有料講座、模試を効果的に利用できるように、教職課程・実習支援センターと連携しながら支援を行っている。二次試験対策講座は 8 月中、自治体に合わせて面接練習ができるように設定し、自信を持って二次試験に臨めるようバックアップしている。

③ 取り組み上の課題

セミナーや二次対策は専任教員の責任コマ数とは別に協力を得ており、専任教員のみの実施が難しい状況である。今後、採用試験の「結果」を出し続けるためには、担当講師の確保が課題である。

なお、教員採用試験対策セミナーについては、受講後のフィードバックを行い、課題を精

查したうえで、今後の運営に活かしていくことが求められる。

基準領域3 適切な教職課程カリキュラム

基準項目 3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

① 現状説明

最初に、1年間に履修することのできる単位数の上限（キャップ制）については、十分な予習・復習ができる事を目的として、どの学部、学科も上限50単位（年間）未満に設定している。ただし、この制度には特例を設け、直近のGPAが3.2以上の学生は、上限を56単位まで認めている。

また、各学科における教職課程科目とその他学科独自の科目については、児童教育学科の場合、専門科目（卒業要件科目）内に教職課程科目を多く設置している。このようなカリキュラム設計については、学科のアドミッションポリシーに定める「教師になりたい強い意志」を具現化し、卒業時の免許取得をサポートするものである。

スポーツ教育学科に於いても、教員免許取得に必要な「教科に関する専門的事項」におけるいくつかの科目は、卒業要件内の選択科目として設置されている。

次に、ICTへの対応であるが、中等、初等教職課程ともに「教育方法・ICT活用論」という科目の配当年次を2022年度入学生より従来の3年次から、2年次へ変更し、早期の学習機会確保に向けての改革を行った。加えて、2021年度入学生からは、BYOD精神のもと、ノートパソコンの必携化に踏み切った。

教職課程のシラバスについては、学生ポータルサイト「ShinwaSmile.net」を通じて、学修内容、評価方法を学生へ明示している。教職課程科目担当者から作成されたシラバスは、教職課程・実習支援センターで文科省が定めるコアカリキュラムより逸脱していないかの確認を全科目で行っている。

教育実習を行う上での、必要な履修要件については、「神戸親和女子大学教育実習に関する内規」を定めている。この内規には、校種ごとに実習前年度までに取得すべき科目が定められており、教育実習生の学力的な担保として有効に機能している。

履修カルテについて、教員免許状を取得する学生は、希望資格に教員免許状を登録した段階から、履修カルテ作成の義務が生じる。本学は2学期制（セメスター制を模したもの）を採っており、該当の学生は各学期の学習を振り返って履修カルテを作成することとなる。作成については、ShinwaSmile.netの機能を使って入力を行う。大学は入学からの履修カルテをデータベース上で管理しており、手書きでの作成、管理は行っていない。作成した履修カルテは、4年次生で受講する「教職実践演習」に於いて、担当教員から個別補完的な指導を行うための文字通り「カルテ」の役割を担っている。

② 長所・特色

教育実習への事前指導において、ゲスト講師として、必要に応じて外部講師を招聘している。実際の教育現場を経験されている講師の事前指導を受ける事により、教育実習のイメージをより描きやすくすることを狙いとしている。

③ 取り組み上の課題

履修カルテの入力については、教職課程に身を置く全ての学生が入力の対象となり、各学期数名は期限内に入力できないケースが散見される。また、複数免許を取得する学生については、その校種毎の入力が必要である点を周知するのがやや困難である。

基準項目 3-2 実践的指導力養成と地域との連携

① 現状説明

本学では、神戸市をはじめ、19 の教育委員会と包括的連携協定を締結しており、教職課程を履修する学生を多数学校園にボランティア派遣している。

また、教職を希望する全ての学生が在学中より、教育現場で有益な実践的な指導力を発揮できるよう、様々な取り組みを行っている。

取り組みの1つとして、「学校園体験活動Ⅰ」という正課科目1単位分を設置し、積極的に学生が教育現場での体験を積み、教師の仕事の喜びと厳しさを実感できる機会を提供している。

この科目については、狙いを以下の3点に定め、事前指導を行い参加・目的意識の徹底も行っている。

1. 学校園での教育活動に参加し、実際に教師とその活動を知ることや子どもたちとふれあうことを通して教職への意欲を高める。
2. 教育実習への不安を軽減し、安心して実習に臨めるように、体験活動に参加して自信をつける。
3. 学校園で見られる子どもたちとのかかわりを通して子どもの実態を把握する。

② 長所・特色

教職課程・実習支援センターには兵庫県、神戸市の教員経験者を配置しており、各教育委員会との連携は非常にスムーズである。特にコロナ禍では、十分な教育実習期間が確保できなかったケースに於いても、同校種の学校園体験活動を行う等、学生、実習受入れ校にとってもよい結果を生み出している。

③ 取り組み上の課題

ここ3年間は、新型コロナウイルス感染症の影響で十分な学校園体験活動を実施することができたとはいえない。今後はアフターコロナを見据えて、コロナ前のように活動できるように計画を立てる事が必要である。

しかしながら、修学上、履修科目が多く、平日においても任意の全日を、特定活動に充てる事は難しい。今後、体験時間、活動時間の制約がある中でも、実りある体験活動の在り方を模索していく事が課題である。

また、教職課程・実習支援センターが把握できないボランティア活動も一定数存在し、もしも予期せぬ事故が起こった場合の対処が困難であることが予想される。幸い、今まで大きな事故はなかったが、今後はより厳格に活動内容を事前に把握することが求められる。

III 総合評価

文学部では、国際文化学科に中高国語の教員免許状が取得できる課程が設置されている。教育学部の児童教育学科では、幼稚園、小学校、特別支援学校（知・肢・病）、中学校の数学、英語の教員免許が取得でき、同学部のスポーツ学科では、中高保健体育の教員免許が取得できる。

各学科において、目指すべき教員の姿についての共有は行われているが、昨今教員を取り巻く環境変化のスピードは非常に速く、絶えず時代の要請に関心を持ち、的確な目標設定を行うことが求められる。

また、教職課程の組織的な運営という観点から、事務組織上「教職課程・実習支援センター」を設置し、教職課程のカリキュラム運営はもとより、教育実習の事務手続き、教員採用試験対策講座の企画運営等、色々な角度から学生の教員免許状取得、教員採用試験の合格をサポートしている。

キャリア支援に関しては、学内組織のキャリアセンターと協働した試験対策の実施、また学校園体験活動機会の提供等を行っている。面接練習等は多くの教員の協力を必要とするため、学内関連部署との情報共有を図っている。

教職課程のカリキュラムに関しては、教職関連法規の遵守、コアカリキュラムに沿ったシラバスによる授業運営は当然のこととし、その他アクティブラーニングやオンライン授業を積極的に取り入れている。

履修カルテについても、学習における各学期の振り返りとして有効に活用されており、集大成である教職実践演習に於いては、在学中の学習履歴を振り返るための貴重なツールとなっている。

ICTの活用についても、法改正の求めに応じ、情報通信機器の活用のみならず情報通信技術の修得を教科教育法に関する授業内で展開している。

以上、本学では様々な観点から学生の教員免許状取得に対してのサポートを行っている。また、免許状の取得だけではなく、教員採用試験の現役合格を目標としたセミナーや対策講座の体制も整えている。今後は、年度ごとに実施した事業についての振り返りを行い、翌年度以降にその反省を活かしていく流れ作りが求められると考える。

何れにせよ、教員採用試験を受験し、合格、晴れて教員になるというのは、あくまでも学生自身であるので、これからも学生本位、学生目線での教職課程運営を行っていくことが肝

要である。

IV 『教職課程自己点検評価報告書』作成プロセス

- 2022年3月16日 自己点検・評価について情報共有および作成項目の確認
(自己評価WG)
- 2022年4月13日 教職課程検討部会にて、今後の作成スケジュールを共有
作成担当者の決定
- 2022年5月～9月 原案の作成・検証
- 2022年12月 経過報告
- 2023年1月20日 私大教へ中間報告を提出
- 2023年3月7日 中間報告への回答受領。その後、加筆修正作業。
- 2023年3月 学内会議にて承認

V 現況基礎データ一覧

令和4年5月1日現在

法人名 学校法人 親和学園					
大学・学部名 神戸親和女子大学 文学部					
学科・コース名（必要な場合） 国際文化学科					
1 卒業生数、教員免許状取得者数、教員就職者数等					
① 昨年度卒業生数					51
② ①のうち、就職者数 (企業、公務員等を含む)					37
③ ①のうち、教員免許状取得者の実数 (複数免許状取得者も1と数える)					13
④ ②のうち、教職に就いた者の数 (正規採用+臨時的任用の合計数)					5
⑤ ④のうち、正規採用者数					1
④のうち、臨時的任用者数					4
2 教員組織					
	教授	准教授	講師	助教	その他 ()
教員数	11	1	0	0	
相談員・支援員など専門職員数					

現況基礎データ一覧

令和4年5月1日現在

法人名 学校法人 親和学園					
大学・学部名 神戸親和女子大学 教育学部					
学科・コース名（必要な場合） 児童教育学科、スポーツ教育学科					
1 卒業者数、教員免許状取得者数、教員就職者数等					
① 昨年度卒業者数					290
② ①のうち、就職者数 (企業、公務員等を含む)					270
③ ①のうち、教員免許状取得者の実数 (複数免許状取得者も1と数える)					277
④ ②のうち、教職に就いた者の数 (正規採用+臨時的任用の合計数)					172
④のうち、正規採用者数					123
④のうち、臨時的任用者数					49
2 教員組織					
	教授	准教授	講師	助教	その他 ()
教員数	37	10	4	0	
相談員・支援員など専門職員数					